

娠に対しメソトレキセート（以下 MTX）を局注、高濃度ブドウ糖液を局注、子宮動脈塞栓術（以下 UAE）を施行し、その後正常妊娠に至った3症例を経験したので報告する。

【方法・結果】 症例1は37歳、0経妊0経産。最終月経より5週、血中hCG 2,621 U/lであるにも関わらず子宮内に胎嚢を認めず、異所性妊娠を疑われ当院紹介受診。経膈超音波断層法で子宮内腔と離れた子宮頸部内に胎嚢と、胎嚢内に卵黄嚢と心拍を有する胎芽を認め、子宮頸管妊娠と診断。保存的療法としてMTX局注療法を行った。経膈超音波ガイド下に胎嚢内容物を吸引し、MTX 25 mgを局注した。局所注射後hCGは下降を始め、10日目頃から尿中hCG・血中hCGともに速やかに低下した。14日目に外子宮口より胎嚢の自然排出を認めた。また、MTXによる副作用は認めなかった。治療後月経の再開を認め、自然妊娠成立。現在明らかな異常なく経過観察である。

症例2は、0経妊0経産。最終月経より8週にて来院。症例1と同様に経膈超音波ガイド下に保存的療法として高濃度ブドウ糖液を局注を施行した。治療後2ヶ月後月経の再開を認め、その後自然妊娠成立し生児を得た。

症例3は、0経妊0経産。最終月経より6週にて前医にて子宮内容除去術を施行。大量出血にて当院救急搬送となった。経膈超音波にて頸管妊娠と判断し、大量出血と高度貧血の為緊急処置が必要と判断しUAEを施行。その後自然妊娠成立した。

【結語】 今回、子宮頸管妊娠に対し異なる治療法を施行し、その後正常妊娠となった3例を経験した。子宮頸管妊娠に対しては確率された治療法がないのが現状であり、本症例のような任孕能を希望する場合、様々な治療法を選択する事は有用であると考えられた。

### P3-57.

#### The effect of busulfan on the immune system and spermatogenesis in immune-competent mice

(Department of Anatomy, Tokyo Medical University)

○Yoshie Hirayanagi, Ning Qu, Shuichi Hirai

Munekazu Naito, Miyuki Kitaoka, Shogo Hayashi

Naoyuki Hatayama and Masahiro Itoh

Testicular cells transplantation has been experimentally used to investigate the biology of spermatogonial stem cells (SSCs), production of transgenic animals, and restoration of fertility in rodent models. In general, congenitally immunodeficient mice such as scid or athymic nude mice have been used as recipients of xenogenic SSCs. Recently, we demonstrated that the rat spermatogenesis can occur in seminiferous tubules of recipient mice after transplantation of the rat SSCs. For the successful transplantation, busulfan (Myleran, 1, 4-butenediol methanesulfonate, 40 mg/kg) is injected to the recipients for depletion of endogenous germ cells before the donor SSCs transplantation. Considering the immunosuppressive effect of busulfan, we studied the immune function of busulfan-treated recipient mice in the present study to know whether the success of xenogenic spermatogenesis in the recipients is dependent on busulfan-induced immunosuppression or not.

### P3-58.

#### 東京医科大学第1学年「医学入門」7年間のまとめ

(化学)

○荒井 貞夫

(皮膚科学)

坪井 良治

(健康増進スポーツ医学)

勝村 俊仁

(脳神経外科学)

原岡 襄

(小児科学)

宮島 祐

東京医科大学第1学年では、長年にわたり「医学

入門」という科目が開講されてきた。その内容は、カリキュラム改編により少しずつ変化している。教育要項によると、その目的は、平成4年度以前は「現代医学の主要なテーマや、医療の実態についての生々したイメージをもち、あわせて救急医療のための初歩的手技を身につけることを通じて、医学生としての自覚を促すこと」、平成5年度より9年まで「基礎医学・臨床医学の諸分野を入門的に紹介」、平成10年より大学病院での「臨床医学を中心とした early exposure」、平成12年には、これに患者看護実習が加わった。さらに平成15年のカリキュラム改革にともない、医学入門（統合コース）「臨床と基礎を統合した early exposure」となり、平成17年度まで実施された。いずれも、大学に入学したばかりの1年生が医学に触れ学習意欲を向上させる動機付け、すなわち早期体験学習を目的として行われてきた。

現在の「医学入門」は、座学を少なくし実習・討論を取り入れた学生参加型とすること、さらに「医学入門」全体のストーリー性を重視することに留意して、平成18年度より実施されている。その内容は、(1) 体験学習・実習として、マナーの習得、エスコート実習、高齢者・身体障害者体験学習、外来体験実習、患者看護実習、基本的臨床技能実習（医療面接・バイタルサイン・心肺蘇生法）(2) 講義・講演とグループ討論・発表会を組み合わせたもの(3) 従来型の講義 の3つのタイプに分かれている。

平成18年度から24年度までの7年間、無記名でアンケート調査を行った。回収率はほぼ100%である。その結果、(3) 従来型の講義に比べ(2) 講義・討論・発表会を組み合わせの方が興味をもって参加でき、さらに(1) 実習の満足度が高い傾向がみられた。特に「患者看護実習」は85.5%の学生が満足と答えた。

### P3-59.

#### 東京医科大学医学科5年生における地域医療実習の現状と学生による評価

(医学教育学)

○菰田 孝行、R. ブルーヘルマンズ、泉 美貴  
(医学教育学・北海道大学医学教育推進センター)

大滝 純司

(茨城：内科（総合診療科）)

柳生 久永

(八王子：総合診療科)

青木 昭子、葦沢 龍人

(公衆衛生学)

小田切優子、井上 茂

(健康増進スポーツ医学)

村瀬 訓生、勝村 俊仁

(社会人大学院4年医学教育学)

関 正康

(社会人大学院4年医学教育学)

赤石 雄

【背景】 文部科学省・厚生労働省「医学教育モデルコアカリキュラム」に「地域医療教育」の項目が盛り込まれたことを契機として、平成21年度より、医学科5年生の必修として「地域医療実習」が導入された。初年度は1日だけの実習であったが、日程と内容を拡充し、平成24年度には月曜日から金曜日までの5日間の実習を実施している。

【目的】 東京医科大学における地域医療実習に対する学生からの評価を通して現状を明らかにし、その運用の改善をはかる。

【方法】 2013年2月に第5学年BSL統合講義の時間を利用して、「地域医療実習に関するアンケート」を実施し、のべ91名から回答を得た。アンケートは、①「実習先の雰囲気」、②「指導医の指導」、③「実習全体」の3項目とし、それぞれへの評価について、「よかった(5点)」から「よくなかった(1点)」までの5件法で回答を求めた。

さらに、「班別の話し合いで、実習先を決定することの賛否」を尋ね、「改善点」と「感想や意見」について自由記述での回答を求めた。

なお、本調査はBSLの成績に一切関係しない旨をあらかじめ教示し、無記名で実施した。

【結果】 3項目に対する学生の評価は、①「実習先